

アタマが駄目ならアシがある

ながれ

原 剛 (はら たけし / 早稲田環境塾塾長)

「哲学」「生態学」を必修科目に

御茶ノ水・中央大学会館での環境文明 21 の集いの場でのことだ。「大企業の環境不正事件、企業風土（環境文化）の貧困がとめどなく落ちてしまったのは何故か。」聴衆の一人が質問した。NEC の社員が応じた。「それは社長たちがマークシート試験の世代だからですよ」。会場は湧いた。私は共感を覚えた。「二択」の課題を問われれば「あれか、これか」しか答えようがない。しかし、自然、人文科学ともに、あれでもないし、これでもない領域から時代を変えるような気付き、発想、発明がなされる。それが私たちの経験知ではなかったか。科学とは哲学であり、「技術」はその応用の形態である。「文明」の由来は従って哲学を冠した「科学技術文明」なのだ。事柄（役人、政治家の用語では“事案”）の根本を理解するのに際してマークシートによる解は、視野の狭い「見送り三振」に他ならない。境界（関連）領域が他の科学分野に比べて広い環境の科学（一例が生態学）に、マークシートの思考は有害、危険である。少なくとも最適解ではない。

「環境影響評価とは、あれか、これか迷い、とまどう憂いの科学である」。文理融合型の官僚大井道夫氏（環境庁自然保護局参事官）の言である。

社長ら 3 人が横並び、10 秒間深々と頭を下げる“お詫びの風景”が TV の社会風物詩（四季を通して）となって久しい。

日本の政治風土（環境文化）はマークシート社会の当然の帰結であり、もはや絶望的に企業よりもさらに底辺をいく態である。その政治状況を支えているのが日本民衆の多数派

だ。その社会の先行きは何をか言わんやである。どうしてこのような社会、国民になってしまったのか。岸田文雄首相、橋下徹維新の会元代表は、ともに私が学んだ早稲田大学法学部の後輩である。

私は早稲田大学教務部の参与を務めた。二人の言動を顧みて田中愛治総長に伝えたい。「哲学」と「生態学」をリベラルアーツの必須科目にせよ。人間とは、自然とは。人間社会と自然の関連とは「いかなるものか」を考究し、二択ではない論文の作成を求めよ、と。

あじさみに腐臭ただよひ

日本はかならず 日本人がほろぼす
八方破れ 十方崩れみならずの

われのゆくてにネオナチもゐる

塚本邦雄は昭和 26 年（1951 年）の日本をそのように詠んだ。前年に朝鮮戦争が始まり、警察予備隊（自衛隊の前身）が発足していた。

今時の世相そのままの有様ではないか。心折れ、心腐ちてしまった、我ら今。

地域から生活知の再生を

劣化した頭脳と背骨を矯正するには意志により動かすことが可能な随意筋の機能、つまり手足を鍛えること以外にない。

1995 年 8 月、毎日新聞の論説委員だった私は敗戦 50 周年記念社説を山形県高島町で書いた。“「宮沢賢治の理想求め」—まほろばの里に共生する農”、の見出しがついた。

その年医師の国家試験合格者数が新規就農者の数を上回った。われらの生活知は医食同源、身土不二ではなかったか。その関係が逆

転した現象を社会の「近代化」「発展」と称するのか。

高島町は作家有吉佐和子が1974年朝日新聞に連載、農薬禍を告発し大きな反響をよんだルポ風小説「複合汚染」の取材現場だった。

そこには有機無農薬稲作の指導者で類稀な表現力を有する農民詩人星寛治（2023年没）がいた。1973年「儲かる農業」を指向した農業基本法に、青年農民38人が反旗を翻し、有機無農薬稲作に踏み切った。

呼応する東京、大阪の消費者グループが産物を買取り生産者、消費者提携の原点となった。日本人の誰もが農薬BHCとDDTに汚染されているさ中で、彼らの行為は社会部記者の私を決定的に環境報道へ、高島へと向かわせた。

客員編集委員として新聞社との関係を保ちながら、私は1998年早稲田大学大学院アジア太平洋研究科の教授に転じた。「環境と持続可能な発展」論とゼミを開講すると、多くの日本人学生と共にアジア諸国から留学生が志願してきた。

「日本は産業技術文明の先進国でありながら、どのようにして環境破壊を克服したのか。」「それは違う。間違った認識だ。」水俣や農薬問題を挙げて私は彼らにそう言い続けた。しかし、そのことをどこで立証し、代替案として「持続可能な発展をめざす社会像」を学んだらいいのか。

私は学生たちと高島に合宿し、星寛治氏らを講師とする座学と農作業を通じて地域社会、農民と交わることにした。面的に展開された有機無農薬農法と都市の消費者との提携運動が、地域の教育、産業、行政にもたらした多彩な成果に注目したからだ。

経済学者レオンチェフの「産業連関表」を参考に、「環境連関表」を作り、「新しい社会像」を考察するよう学生たちに求めた。立教大、東京農大、慶應大などもそれぞれの視点

から「高島ゼミ」を開講した。私のゼミから6人の大学院生が高島で「持続可能な社会発展像」を課題に修士論文を書いた。北京政府からの留学生は、国策と地域自治の対立と市民社会によるその克服を課題に博士論文を作成した。

ひとびとの精神史を刻もう

東日本大震災では奥羽山脈の峠を超え、多くの福島市民が高島へ避難してきた。軽微ではあったがこの地にも放射性物質が及び、産消提携にキャンセルが続いた。

早稲田大学のゼミを継いだ市民参加の早稲田環境塾生たちは、高島出身の童話作家浜田広介の「泣いた赤鬼」のホントウノトモダチ青鬼にちなむ「青鬼クラブ」に集い、高島産のコメやリンゴを買取った。毎日新聞本社一階の「モッタイナイ」コーナーで、月例「高島物産即売会」を催し、新聞社のネットを介して広く発信した。修学旅行中に訪れた高島中の生徒たちが、お礼の「マイロード」を合唱、大きな拍手を浴びる一幕も。社会学の第一人者、栗原彬立教大名誉教授らによるコーナーでの連続講演には多くの人々が加わった。一連の状況は栗原彬編「ひとびとの精神史」（岩波書店）に紹介されている。「泣いた赤鬼」風に記せば、

アタマモセボネモダメ ソンナトキニハ
アシテヲウゴカソウヨ

地域の現場から手足を使って新しい生活知を創り出していこう。

高島農民たちの試みは昨年50周年を数え、11月25日盛大な記念の集いが催された。直前にパリの国際有機農業連盟（IFOAM）から大賞が贈られた。テイケイ（提携）が国際用語になったのだ。成長経済の罫にはまった国策と政党に反旗を翻し、新たな社会発展像をめざす人々に、農水大臣と県知事が祝意を伝えた。皮肉な光景ではあるが「よし」としよう。